
ほのぼの小説書く

五十嵐 ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほのぼの小説書く

【Nコード】

N1512W

【作者名】

五十嵐 ゆう

【あらすじ】

どうみてもほのぼのです

序章（前書き）

主人公：陽

普通の中学生

ミリタリー趣味があり、

幼馴染の波瑠の所為でやけに生物学に詳しい

幼馴染：波瑠

IQ140の天才

生物学、コンピューターに詳しい

性格はキチガイ

英語、ラテン語、古代ギリシャ語、アラビア語、古語に長けている

序章

陽「暇だな、何か刺激的な事ないかな？」

俺はなんとなく天井にそう呟く

波瑠「じゃあ私が刺激的な事をしてやろう！」

幼馴染が空気銃持って参上

陽「やっぱ平和が一番だ、うんうん日本国憲法にもあるじゃないか」

陽「日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から「長い！」

陽「で？何の用だ？返事によつては警察を呼ぶ」

波瑠「ちよつと冗談キツイぜ」

陽「俺は至つて真面目だ」

波瑠「はあ、まあちよつとお薬作つたから。飲んでみて？」

陽「いやだ、せめて効能を教えろ」

波瑠「DNAに干渉して「却下!!」」

波瑠「何？まだ途中までしか言っていないわ」

陽「絶対やばい薬だろ!!」

波瑠「そんな事ないわ、実際に服用した被検体8700号から8799号は半年間の生存を確認したわ？」

陽「半年！？そして1号さんから8699号さんはどうなった!？」

波瑠「別に半年後死ぬ訳じゃなくてね、半年だけ観察してて見事に健康状態である事を確認した訳」

波瑠「そして1号から8699号は……まあ、…遠いところで幸せに…」

陽「つまり死んだって事じゃねえか!!やだよ!!」

波瑠「別にこれは8799号に飲ませたのと同じだから少なくとも服用後半年は生存出来るわ」

陽「それは1年後、2年後は死ぬかもしれないって事だろ!?ふざけんな!」

波瑠「はあ…じゃあ仕方ない…」

陽「諦めたか…」

波瑠「うりゃ！」

波瑠は俺に何かを注射した

俺は倒れる

波瑠「大丈夫よ、これは只の睡眠薬、でも抵抗が少なくなる程度だから安心して」

陽「ッ！やめ……」

俺は必死に抵抗する

俺は何かを飲まされる

陽「……」

波瑠「完全に効果が出るまで1時間と言った所ね、それまでおやすみ」

バチンという音がして、俺の意識は消えていく

波瑠「起きなさい」

陽「はっ！」

俺は確か…何かを飲まされ…

波瑠「きつちり効果が出てるみたいね」

陽「で、あの薬は何？」

波瑠「DNAに干渉して、猫耳と尻尾を生やす薬よ」

陽「男のままだが？面白いかな？」

波瑠「ああ、貴方が寝てる間に女性ホルモンと、それを促進させる薬打ったから」

陽「てめえ…」

波瑠「容姿は女性よ？あと声帯ちょっと弄ったから」

陽「まじで通報するぞ？」

波瑠「ふふ…その格好で？」

陽「あ？」

俺の目の前に姿見が置かれる

なんでわざわざ姿見を用意したかは疑問だが、それより…

陽「まじで猫耳生やしやがった…」

波瑠「ええ、これを開発する為に何匹の猫を殺した事か…」

陽「お前には倫理観がねえのか」

波瑠「失礼ね、クローン使ったに決まってるじゃない」

陽「もつとダメだろ」

波瑠「人間のクローンは禁止だけど、動物のクローンなら農家でもやってる」

陽「はあ…で、いつ戻してくれるの？」

波瑠「戻す方法を教えて欲しいな」

陽「殺すぞ？」

波瑠「だってえ、元の貴方のDNAマップが必要なんだもんっ」

陽「じゃあ最初に採っとけや！どうするんだよこれ！」

波瑠「……………どうしようか」

陽「……………一発殴らせろ、木刀で」

波瑠「いやーん、痛いのいやー」

波瑠「冗談はその辺にして、と…」

陽「おい、本当にどうするんだ？」

波瑠「失礼ね、既に貴方のDNAマップくらい採取済よ、そこまで私も馬鹿じゃない」

陽「なんだよ…よかった…いや、なんで勝手に採ってるの？」

波瑠「貴方の髪の毛っただけだけど、なにか？」

陽「甞るな、それは窃盗及び傷害罪だ」

波瑠「いいじゃない、これ悪用して貴方のクローン作ったり貴方の遺伝子暗号解いて侵入したりしない分」

陽「そんな発想ねえよ、俺に恨みでもあるのか」

波瑠「いや、逆に貴方が好きだからさ」

陽「聞き飽きた」

波瑠「いじりやすくて好きだ」

陽「…なんなのお前」

波瑠「あえて言うなら神よ」

陽「…もついいよ…」

波瑠「じゃあ貴方を戻す準備が出来るまで、後2年ね」

陽「待てコラ」

波瑠「冗談よ、直ぐに準備に取り掛かる。最低でも3日かかるから準備が出来たら連絡する」

陽「3日！？ちょっと待てや3日間これで生活せいと？」

波瑠「科学の発展には犠牲は付き物だよ、これを学会に発表すれば…」

陽「ああ、間違いなく最悪の科学者として報道されるな」

波瑠「あ…1号から8699号が居るから逮捕だな…くそう」

陽「アレイスター・クロウリー以上の悪人だな」

波瑠「でもあいつら全員自殺希望者だったし、殺人罪じゃなくて同意殺人罪」

波瑠「最高刑で7年、最低では半年で出れる」

陽「でも社会的には死刑だね、社会的には完全に抹殺された様な物だね」

波瑠「いいのよ別に、金なんざいくらでも有るという状態になれるに決まってる」

陽「現実を見るよ」

波瑠「ええ、『絶望はすぐ傍らにある、近すぎて見えないだけ』」

序章（後書き）

休憩に書いてみた
批判は受け付けるが認めない

巻の話（前書き）

理論上はこの薬を作る事は可能

ただ、法律倫理国際条約全て無視した実験が必要そうだけど

壱の話

陽「どうすんだよ、これ…」

あいつも余計な事をしてくれる

猫耳と尻尾は置いておいて

容姿と声を変えらるとは何事だ？

これでは、家族に事情を伝えても黄色い救急車が警察呼ばれるぞ

……どうしようか…

陽「うーん…」

妹「おにいちゃん？波瑠さん帰るけど見送らなくていいのー？」

あのアマまだ帰ってなかったか…それにしても本気でどうすんだよこれ

妹「お兄ちゃん？」

妹がドアを開ける

陽「待つ——」

遅い

妹「…（。D）」

陽「あー…」

陽「——えっと、これは…

妹「可愛い！モフらせるッ！」

陽「口調変わってるぞお前」

そのツツコミは無視され、尻尾をもふもふされる

陽「……………」

妹「ほあー」

妹は目をきらきらさせている

陽「…はあ…」

妹「で、貴方誰なの？」

もふもふしながら聞いてくる

陽「…………陽だよ」

妹「ふーん……どういう事なの？なんの因果でこうなったの？」

まだもふもふしている

陽「難しい言葉使いやがって……」

妹「じゃあノートに字書いてよ、お兄ちゃんの筆跡は印象的だし……」

陽「おう、……尻尾を離せ」

妹「えー」

陽「じゃあノート取ってきて」

妹「後ひとモフリ……」

陽「……はあ……」

陽「ひゃいっ！ちよっ！付け根は触るな！」

妹「え？あ、ごめーん」

陽「……で、いつやめるの？」

妹「じゃあ、そろそろ……」

陽「ん、それで筆跡の話は？」

妹「ああ、忘れてた…じゃあちょっと待ってね」

陽「ん」

妹「鉛筆と落書き帳持ってきた」

陽「おう」

妹（…しつぱを縦にパタパタしてる…？なんだっけこれ…）

陽「うーん…」

俺は取り敢えず

「努力」と書いた

妹「何故この字をセレクトしたの？」

陽「なんとなく——うあ！」

尻尾掴んできた、どれだけ尻尾好きなの？

陽「いきなり掴むな！」

妹「ごめんごめん、あはは」

陽「むう……」

陽「ああ、もうウゼエ！」

妹「でも尻尾は立ってるよ？」

陽「……………尻尾が立ってるのは……………あー……………俺は猫か！」

妹「この尻尾は猫がベースなんだね」

陽「はあ……………感情がダダ漏れじゃねえか……………」

妹「でもかわいいじゃん」

陽「……………まあ3日で戻れるし、我慢我慢」

巻の話（後書き）

続く

式の話（前書き）

今回はほのぼのイクゼ

式の話

波瑠「うむ…」

結構寸分の狂いが許されない手術が必要なのだ

波瑠「んーと……チツ、奴を連れてくるべきだった」

波瑠「呼ぶか…」

陽視点

なんとか説明して、信じてくれた

しかしこれで3日か…きついな…

妹は常にしつぽをモフモフしてくるし…

ブルルルル

ケータイが鳴り響く

相手は波瑠だ

陽「もしもし、死ね」

波瑠『いきなりご挨拶だな、まあいい、ちょっと来い』

陽「あ？なんで？」

波瑠「少し身体検査をする。まあ身長体重座高etcを測るだけだが」

陽「…分かった…………この姿で行けるか！」

波瑠「あ、そうだったね…どうしようか」

うーん、と唸り声が聞こえる

波瑠「じゃあ今からウチのスタッフが向かえに行くから」

陽「おう、……………徒歩で？」

波瑠「車に決まってるでしょう？」

陽「というかスタッフ居たんだ…」

波瑠「ああ、何人が居る」

陽「それじゃあ、今からガスガンで撃たれるのと木刀で殴られるのどっちか選んでおけよ？」

波瑠「了解」

電話が切れた

さっきからずっと尻尾をつかもつとする妹の手をよけている

陽「じゃあ、俺出かけるから」

妹「えー…」

陽「大丈夫だって、すぐに帰ってくる」

俺はガスハンドガンをポケットに入れ

木刀を手に持って待つ

来た、車が

???「陽さんですね？お迎えに参りました」

陽「ああ、じゃあ行くか…」

車内

広谷「やあ陽君」

陽「…げ……」

広谷君、この人は変態で下ネタ大好き

そして俺を見る目がちょっとあれ

確かに俺は中性的な外見ではあるんだ、身長も低いし

広谷「波瑠さんから薬を預かってるんだ、研究所まで結構あるから今の内に飲んでおく？」

陽「あ、おう」

飲んだ、すると股間に痛みが走った

別に痛みはそんなでも無いし、すぐに痛みは消えた

陽「……で？これは何の薬だ？」

広谷「これはね、女性になる薬だよ。グヘヘ」

ざけんな！

陽「何をする気？」

広谷「わかるだろう？」

助けてえーりん！

俺は慌ててガスガンをポケットから取り出し、発砲する

広谷「痛っ!」

その隙に俺は木刀を取ってその先を広谷に向ける

陽「動くな」

広谷「ひい!」

30分くらい経って

???「着きました」

陽「ありがとうございます」

波瑠「よっ!」

陽「よっ!じゃねえよ...よくもこんな事してくれたな...」

波瑠「謝ったじゃん...」

陽「そっちじゃねえ、広谷がお前の指示って俺に女体化の薬投与させたぞ」

波瑠「んな事指示してないんだけどなー?広谷君」

広谷「.....はい」

波瑠「ちよつとそこを動くな」

彼女はポケットから拳銃を取り出した、トカレフ。ミリタリー趣味がある日本人では誰でも分かる銃だ

波瑠「覚悟は出来た？」

彼女は銃を広谷に向けた

広谷「すいませんでした！堪忍してください！」

波瑠「テメエが余計な事した所為で、手術に影響が出たらどうしてくれる？」

エアガンに対してビビりすぎじゃね？まあ実銃の可能性はコイツなら有り得る

波瑠「Get lost」

彼女は引き金を引く

しかし、カチとも言わない

波瑠「あれ？」

陽「ハンマー降ろしてないんじゃない？」

波瑠「よく分からない…撃ったことなんて無いし…。陽君後で教えて」

陽「ん、で何をすんの？」

波瑠「その屑の所為でやる事と、調べる事が増えた…」

陽「まじかよ…」

波瑠「……そいつを被検体室に連れて行け、他の自殺希望者と同じ様に扱え」

「???」「了解！」

広谷「やめてくれえ!!」

広谷は暴れる

「???」「暴れるな!こい!」

波瑠「はあ…命令がないと動けないの?…鎮静剤を打て」

「???」「ハッ!」

広谷「うわあああああああ!!」

哀れ広谷…

式の話（後書き）

続く

参の話（前書き）

さて、今回はミリオタの本能に従って文章を書いていきますよ

参の話

波瑠「じゃあ地下の防音室で銃の使い方教えてよ」

陽「ん、いいけど…その銃何処で？」

波瑠「自営業のお方に、私が開発した薬をあげて。その代わりに使わなくなった銃を貰った」

陽「おいしい！？一般人が大量に消されるわ！」

波瑠「大丈夫よ、ヤ○ザはカタギに手を出さない。出す理由が無ければ」

陽「まあ、だろうね」

波瑠「じゃあ地下へ行こうか」

・・・・・・・・・・・・・・・・

地下防音室

波瑠「ここならアンアンな事しても誰も気づかないね」

陽「何を言っているんだ？」

波瑠「ごめん、取り敢えず弾は10000程貰ってきたわ。」

陽「ん、じゃあ先ず^{マガジン}弾倉を出そう」

波瑠「まがじんって？」

陽「ここのボタンを押して」

ボタンを押して、マガジンを取り出す

波瑠「ほー」

陽「これに弾を入れる」

波瑠「これに入れるのか…」

陽「うん、確か装弾数は8発だな」

俺が先ずマガジンに弾を1発込める

彼女が真似して7発込める

手先が器用なのか、サクサクこなす

陽「で、これを銃に入れて」

波瑠「ホイ」

陽「で、ここをスライドする」

波瑠「なんかそっこのドラマで見た」

彼女はブローバックをする

陽「で、弾は装弾された。このまま引き金を引くと弾が出る」

波瑠「ん」

陽「待て、ちゃんと構えろ」

波瑠「どうやるの？」

陽「左手は右手に添える様にして、右腕を伸ばし、左腕を曲げる」

波瑠「よし！」

陽「で、撃つ直前まで引き金に指をかけないで」

波瑠「分かつとるわ」

陽「リアサイトを見て、狙って」

波瑠「リアサイト？」

陽「この出っ張りの間に、前の出っ張りが入る様に」

波瑠「こうか…」

陽「反動を上を受け流す様に撃て」

パンという音がして、彼女が後ろに尻餅をつく

陽「大丈夫？」

波瑠「びつくりした」

陽「反動を受け流せてないのか？まあその内出来るようになる」

波瑠「うう…」

陽「まあ頑張れ」

波瑠「貴方に処方された、性転換する薬さ…」

陽「うん」

パン

波瑠「おおっと。あれさ、遺伝子を変更して、男性だった痕跡を一切消し去る物でさ」

陽「なんか凄い、というか戻れるの？」

パン

波瑠「うおっ。戻れるよ。…あれはさあ、性同一性障害者や同性愛者の為に作った究極の性転換グッズでえ」

陽「まあ需要は高そうだね」

パアン

波瑠「遺伝子が女性だから、妊娠も出産も出来る代物でさ」

陽「すごいなオイ」

パアン

波瑠「でも、子宮や卵巣がないからそれを復元する物も必要で」

陽「まあな」

パアン

波瑠「凄く頑張って、子宮と卵巣と女性器を作る理論を組み立てた。ものすごく時間と労力を要した」

陽「だろうね」

パアン

波瑠「それで開発したのが、あの薬。あれは副作用が股間の痛みだけで済んだ完璧な物だ」

陽「すげえな」

パン

カチ、コト

波瑠「これで多くの人間が救われる。そう思った…。だが…」

陽「だが？」

カチカチカチカチ

波瑠「そんな技術も…あの様に悪用する奴が居る…！」

陽「……………」

ガチャン、ガチャ

波瑠「制作者に悪意が無くても、使用者に悪意があれば。それは凶器になる」

陽「だろうね」

パンパンパンパン

連射してる、怒りが凄いのか

陽「でも、この猫耳を生やす薬は何の為に？」

波瑠「適当にvipで安価取って、DNAの改造技術の実験をする

ために」

陽「安価かよ…」

波瑠「片手で撃てるかな？というか、片手で撃てないと困る」

陽「なんで？」

パンパンパンパン、カチ

波瑠「いや、私が大統領だったら、全世界の信用を失うのを覚悟してでも、この技術を奪うから」

陽「まあ、そうだろうね」

参の話（後書き）

続く

肆の話（前書き）

ほのぼのの回です

肆の話

陽「でも、自衛隊や米軍が攻めてきたら拳銃一丁だけなら勝ち目ゼロじゃね？」

波瑠「拳銃は単なる護身用、軍が来たら王水とウイルスぶちかましますわ」

陽「地味に怖え」

波瑠「勿論、私にはそのウイルスの耐性が出来てる」

陽「だろうね」

波瑠「取り敢えず、貴方を戻すためのシステムを組み立てる事に面倒くさい作業を再開しましょう」

陽「そもそもテメエが薬飲まなきゃ済んだ話しじゃねえの？」

波瑠「……ごめん。…まず、身長体重座高を計り、成長を抑止する薬を飲みましょう」

陽「成長の抑止って…チビな俺に対する嫌がらせか？」

波瑠「はあ、後で成長ホルモンを活性化させる薬あげるから」

陽「薬便利だな」

波瑠「これだけの薬を開発するのに、一体いくらかかったと思うてるの？」

陽「まあ、軽く1億はいくだろっな」

波瑠「とりあえず、身長を測るから靴脱いで」

陽「ん、了解」

波瑠「157・7cm、っと」

陽「低っ…」

波瑠「じゃあ体重測るから全裸になって」

陽「えっ…？」

波瑠「I'll measure your weight, so please take off. Okay？」

陽「英語で言わなくてもわかるわ…！」

波瑠「じゃあ、さっさと脱げ。そんな乙女みたいな反応しても同性は嫌悪感しか感じないんでね」

陽「そういえば、俺性転換する薬飲まされたっけな…」

波瑠「同性に見えるのは、女性ホルモンを注射した所為だけどね」

陽「まあ、そうだな…」

波瑠「うん、じゃあ早くして、大丈夫だよ。子供の頃は良く見てたし」

陽「……まあ……そうだね」

波瑠「うん、じゃあ早く」イライラ

陽「いや、抵抗があるんだよ。例えマッドサイエンティストでも、女性の前で脱ぐのは…」

波瑠「じゃあ私が脱がせるから、力抜いて、注射痛くなるから」

陽「待てや、何注射する気!？」

波瑠「筋弛緩剤よ、これで抵抗は無くなる」

陽「それ呼吸が止まるやつだろ!？」

波瑠「そうなる前に中和するわ、だから安心して、おとなしくしろ」

陽「うわっ、やめ——」

波瑠「さあて、脱がすぜ…フッヘッへ…」

波瑠「馬鹿な事言っていないでさっさとやろっ…」

波瑠「よし、出来た」

波瑠「じゃあこの筋弛緩中和剤で」

陽「……っ」

波瑠「お目覚めね、いや意識はあったんだろうけど」

陽「ああ、じゃあ体重測るか、体重計は？」

波瑠「ここに、保健室に置いてあるような奴が」

陽「ん」

波瑠「44・0kgと……」

陽「微妙？」

波瑠「少ないわ」

波瑠「次は座高よ」

陽「おう」

波瑠「81・7cm」

陽「どうなんだ？」

波瑠「足が平均より少し長い」

陽「ふう〜ん」

波瑠「よし、データは取れた。もう帰っていいよ」

陽「分かった、じゃあ」

波瑠「学校はどうするの？」

陽「考えても無かった」

波瑠「じゃあ、学校に事情を説明しておくから。お大事に」

陽「じゃあ」

肆の話（後書き）

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

伍の話

電話中

陽「はい？」

波瑠「私だ」

陽「貴様が、なんの用？」

波瑠「学校に手を回しておいた、具体的には金と圧力だ」

陽「何故具体的に言った？そして用事は以上か？」

波瑠「いや、戻るまで学校行くの？それとも休んでおく？」

陽「…この格好で行けってか？」

波瑠「大丈夫、言ったる？学校には金と圧力をかけた」

陽「…ふうん…」

波瑠「で？学校行くのか？行かないのか？」

陽「…今迄皆勤賞だしなあ…まあ手を回してあるなら行っただ方がいいか…」

波瑠「おーけー把握した。じゃあ学校側にはそう伝えておく」

陽「以上か？」

波瑠『以上だ、また明日』

陽「おう、また明日』

〽学校〽

友A「よう！人体実験を無理矢理受けたんだって？大変だったな」

陽「情報回んの早えなオイ」

波瑠「人体実験だなんて失礼な」

陽「うわっ！ビックリした！」

友A「お前が黒幕かッ！！」

波瑠「そうさ、私がやった。後悔は余りしていない」

友A「ということは同意の上か」

陽「睡眠薬で眠らされた上でやられたんだよ。なんで同意の上だと思っただ？」

友A「だって普通彼氏にそんな事しないだろうし」

陽「付き合ってたねえよ」

波瑠「でも好きだよ？」

陽「そうだね、弄りやすくて好きって前言ってたしな！」

波瑠「うん、そうだね。大好きだよっ」

陽「俺もだよ（棒読み）」

友A「なにこれ普通のカップルじゃん。くそが見てるよ童貞処女」

陽「今のコントを見て、普通のカップルと思えるのか…」

波瑠「凄いね、濃硝酸に値するね」

陽「そこまでじゃあないと思うぞ俺は」

波瑠「ツツコミのキレが無くなってきたね」

陽「黙れ小娘！」

波瑠「お前にサンが救えるか！」

そんな感じでわいわい雑談しつつ

放課後になった

陽「いい加減にしろ」

女1「はあ？なんで？意味わかんない」

陽「俺はそれを一度でも許可したか？」

女1「うぜえ、あんたは私の父親か？」

陽「父親じゃなくても、俺には止める資格がある」

陽「いい加減、モフモフはやめてくれないか」

女1「やだ」

波瑠「やあ、面白い事してるね」

陽「助けて…」

波瑠「拒否」

陽「だろうな」

波瑠「さあて、と家に帰って作業をしますか…」

伍の話（後書き）

続く

陸の話（前書き）

人は皆平等に不幸

スラム街の子供も、アラブの石油王も
箸すら持てぬ障害者も、ボクシングの世界チャンピオンも

陸の話

前回より5日程経ったある日

波瑠「久しぶり、両親が死んだ」

陽「久しぶり、良心じゃなくて？」

波瑠「ああ、間違いなく両親が焼死した」

陽「悲しんでるようには見えないぞ？」

波瑠「…葬式で大泣きしたよ…」

陽「……そうか…」

波瑠「遺産分配の会議で何回鎮静剤打ったと思ってる」

陽「お前にそんな感情が残ってるとは…」

波瑠「んだから、作業が全然進んでない」

陽「……まあ仕方ないよ……」

波瑠「とりあえず、遺産は全部私が引き継いだ。まああいつらもゴチャゴチャ言ってたがね」

陽「最悪だなお前」

波瑠「まあ、研究所と研究資料は間違いなく引き継がなきゃいけないし」

陽「あれ両親の持ち物だったのか？」

波瑠「いや、あの研究所は私の。引き継いだのは別の研究施設」

陽「ふうん」

波瑠「とりあえず、私の身柄は親戚の家に行くことになった」

陽「ふうん、そこに兄が居たらエロゲみたいだな」

波瑠「居るけどね？」

陽「居るのか……」

波瑠「フラグは立ちそうにないけどね」

陽「そうだね、フラグが立った結果がこれだしな」

波瑠「ごめんね」

陽「君じゃなかったらガスガンでフルオート射撃してるからね？」

波瑠「これが幼馴染特権か」

陽「ちょっと違う気がするが、まあそんなところなのかな？」

波瑠「じゃあまた」

陽「じゃ」

陸の話（後書き）

次回は波瑠視点

質の話

ただいまMy home

数時間ぶりだね

波瑠「ただいま」

兄「おかえり」

この人は義理の兄、名前は健

読み方は「ケン」。20歳大学生だ

まあ、そんな事は良くてだね。私は行かなければならない

研究所へ

兄「今日も出かけるのかい？」

波瑠「はい」

ちなみにこの人には中途半端な敬語を使っている
謙譲語と尊敬語が適当なのだ

兄（…まだ敬語か…いつになったら心を開くんだろう）

気づいてない

着替えも完了。徒歩で5分の道のりを歩むとしよう

波瑠「いつてきます」

兄「いつてらっしゃい」

〈研究所〉

面白味もないのでカット

22:30

波瑠「そろそろ帰らないと補導されるな」

波瑠「保存して、と」

波瑠「帰るか…」

〈家〉

波瑠「ただいま」

健「おかえり、今日も遅かったね」

波瑠「はい、すみません」

適当に受け流しておく

健「何してるんだ？友達と遊んでるのか？」

波瑠「パソコンと睨めっこしてます」

健「…パソコンならウチにもあるぞ？」

波瑠「インストールしてるソフトの問題です」

健「ウチのパソコンにもインストールしたらどうだ？」

波瑠「そんな事したらパソコンがえらい事になりますよ？」

健「えらいことって？」

波瑠「容量が大変な事に」

健「そのパソコンは大丈夫なのか？」

波瑠「intelのItanium2を1200並列に搭載、メモリは4TB、HDDは10000TB。NASAのスパコンを凌駕する」

健「お、おう…」

波瑠「これ自作するのに、いくら金と時間を使ったと思ってる？」

健「が、頑張ったんだな」

波瑠「……あ…ごめんなさい。暴走しちゃいました」

健「いいんだよ、家族なんだし。その敬語もやめたら？」

波瑠「ん、了解」

く自室く

自室だ、鍵が無いんだよね

今度付けてもらう予定だ

波瑠「さあて、と…」

拳銃を取り出す

とりあえず、ベットの引き出しに仕舞っておく

弾倉に弾は入ってるが、装填はしていない

波瑠「寝るか…」

.....

ドアノブがガチャ、という音を立てる

その音で起きる

波瑠「んー？」

健「あ、起こしちゃった？」

波瑠「何ー？」

健「しっかり寝れてるかなって」

波瑠「ん、寝れてる。だから往ね」

健「ちょっと酷くない？」

波瑠「酷くない、私の睡眠を邪魔したんだから」

健「.....」

波瑠「ふあゝ...んじゃおやすみ」

数時間後

またガチャという音がする

面倒くさいので無視した

健「寝てるか？」

波瑠「……………」

はい、寝てます。だからGet out here!

カチャカチャと音がする

なんだろうな

健「ハア…ハア…」

過呼吸ですか？過呼吸の時は下手に騒がず、落ち着いて行動しましょう

健「波瑠…」

はい。救急車呼んだほうがいいですか？私、携帯持ってませんけど

健「波瑠ううううう！！」

波瑠「うるさい！Shut up!！」

素だと英語やラテン語が混じる

一回、陽と話してるとき古代ギリシャ語とアラビア語が混じった事がある

まあ、そんな事は良くてだね

なんだこれ？私の目の前に下半身裸の義兄が居る

何？罰ゲーム？こんな非道な罰ゲーム聞いたことないぞ

義兄が襲ってくる

私は避ける、そして拳銃を取り出し、内股をかける

そして馬乗りになる

波瑠「何やってるの？」

健「馬乗り…ハア…ハア…」

波瑠「いよいよ殺すしか無くなってきたね」

私は拳銃をブローバックする

健「え！？ちよっ！それモデルガンだよね！？」

波瑠「そう思ってるなら、そのまま死ね」

私は頭に銃口を突きつけた

——電話が鳴った

陽からだ

なんだろう？

波瑠「もしもし」

陽『あ、起きてた？』

波瑠「ええ…。貴方から電話なんて珍しいね。どうしたの？」

陽『いや、ちょっと気になる事があって…』

波瑠「私のスリーサイズ？」

陽『スルーさせてもらっ、この体って…。生理とかあるの？』

波瑠「妊娠するように作った薬だからね。あと3日以内くらいに来ると思うよ」

陽『……まじか…』

波瑠「ははは、まあ頑張れ」

陽『だれの所為だと…』

波瑠「声が聞けて嬉しかったよ。じゃあね」

陽『じゃあ』

健「……今の電話、彼氏から？」

波瑠「ただの幼馴染よ……どうして今の会話で彼氏だと？」

健「いや、『声が聞けて嬉しかったよ』とかさ……恋人にでもないと言わないと思うよ」

波瑠「多少の冗句くらい言うよ、私だって」

健「冗談だったのか……」

波瑠「ええ」

波瑠「興が冷めたし、寝るね」

健「おう」

私はドアノブに手錠をかけて、寝た

質の話（後書き）

続く

人物紹介（前書き）

俺に画力があれば！

人物の絵が描けるのに！！

絵の修行してくる

人物紹介

殆どの人物が苗字未定

陽（♂）

14歳中二

本編の主人公（笑）

髪を伸ばしたら女性に見えるユニセックスな容姿
髪は短く、髪色は黒 瞳は限りなく黒に近い茶色
チビ

運動神経は結構いい

波瑠とは幼稚園くらいで出会った気がする

得意教科は理科（特に生物）

記憶力が結構いい

波瑠が垂れ流してた生物学の話を聞き流してたら覚えたくらい

性格は意外と冷静

波瑠の奇想天外な行動に対しては激しいツッコミを入れるけども

波瑠（♀）

14歳中二

本編のヒロイン（笑）

正直主人公とヒロイン立場が逆転してる気がする

容姿は壮麗

髪は長髪

髪色と目は黒、大和撫子

日本語と英語とラテン語とアラビア語と古代ギリシャ語と古語を操る
幼い頃に覚えたので素になると混ざる。

インドの人は10ヶ国語を使いこなすし、別におかしくはない

ちなみにいつもは考えて発言するので、混ざる事は滅多にない

性格はマッドサイエンティスト

頭の螺子が吹っ飛んでる

倫理観がおかしい

しかし、実験体に自殺希望者を選んではと

被検体が苦しんでる時は麻酔や睡眠薬を投与するので

まだそこらの人体実験よりはマシという主張

陽に好意を抱いてると自称

妹（♀）

9才小3

陽の妹

名前未定

猫好き

いつもは冷静、そして無邪気

たまに陽に『波瑠さんといつになったら付き合っの?』とかいう

ちなみに陽は波瑠を異性としては見ていない

容姿は、陽を小さくして髪を伸ばした様な…

SHIT! 何故俺は絵が描けないんだ!!

なんかダレたので以上です

主人公とヒロイン以外そんなに出番はないのです

あ? 健さん?

…次回に出番やるから…

人物紹介（後書き）

そもそも絵を描く紙もない

捌の話（前書き）

基本的に「交差する世界」をメインにやっています

捌の話

下校時

陽「で、いつになったら戻れるの？」

波瑠「別にもどるためのプログラムは出来てるんだけどね」

陽「そうか」

波瑠「ただ、電子顕微鏡並みの精密作業だし、失敗したら死ぬからさ」

陽「死ぬの!？」

波瑠「微調整に微調整とテストを重ねなきゃ使用出来ない」

陽「なるほどな…」

耳がピクピク動いている

波瑠「……………ねえ…」

陽「何？」

波瑠「耳隠さないの?一緒に歩いてるこっちが恥ずかしいんだけど」

陽「誰の所為だと思ってやがる!!」

俺は彼女の胸倉を掴んだ

波瑠「…私の罪…かな？」

陽「殴っていいかね？」

???「おい！」

陽「あ？」

健「妹を離せ、気違い！」

波瑠「あ、この人は私の義兄、名前は健」

陽「ああ、初めまして。誰が気違いだ、どっちかといつとこいつが気違いじゃ」

健「いいから妹を離せ！」

殴ってきた

陽「いきなり！？」

当然の如く避けた

波瑠「やっちゃっていいよ、そいつエロゲと現実の区別がついてないクスだし」

陽「え！？…了解」

健「年長者舐めんな！！」

殴られる、回避する

陽「動きが直線的、視線も隠す気が感じられない、おまけに動き遅っ！」

健「てめえ！」

回避

陽「そんな動きじゃ100年遅せえつつてんだよ、なんてね」

健「くそがつ！」

回避、からの右シャブ

健「ッ！？」

陽「昇竜拳！」

グリーンヒット

陽「昇竜拳は避けて足払いしないと」

健「ぶっ殺す…」

陽「おーこわいこわい」

殴る、掴まれる

健「取った！」

陽「優しくしてね…／／／」

からの足蹴り

健「くっくッ！」

陽「手に注意が行ってる間に足で蹴り、基本中の基本だよ」

健「オラァ！」

ブン

陽「…ああ、めんどくさくなってきたな…」

健「死ね！」

ブン

陽「オラア！」

健「…ッ！！」

首筋にチョップを入れておいた

陽「疲れた」

波瑠「お疲れ、これはこっちで回収しておくから」

陽「…ん」

波瑠「じゃあ」

陽「んじゃ」

捌の話（後書き）

続く

幕間―楽屋裏―（前書き）

楽屋裏ネタがやりたくなってやった

後悔なんて、あるわけない

幕間―楽屋裏―

波瑠「はい、という訳で始まりました。楽屋裏」

陽「楽屋裏って最終回の後とかにやるもんじゃないの？」

波瑠「ええ、作者も本当は最終回後に色々な暴露をしようと思ったんだけど」

陽「うん」

波瑠「予想外にグダグダしてしまって、『所詮オナニーだし、いいや』って」

陽「そうか」

波瑠「じゃあまず、何から暴露しようか」

陽「これを書こうと思った理由は？」

波瑠「あー…なんとなく？」

陽「おい」

波瑠「だって、そう答えざるを得ないんだもん」

陽「まあ、いいや」

波瑠「ちなみに最初から決まってた事は『ヒロインがキチガイ』これだけです」

陽「え？」

波瑠「いや、本当。主人公の名前すら決まってませんでした」

陽「そんなだからグダるんだよ!!」

波瑠「黙れ!! そんなん作者自身が一番良くわかってるわ!!」

陽「……すまん」

波瑠「…まあとりあえず、次だ次」

陽「何故波瑠は俺に薬飲ませたの？」

波瑠「なんとなく？」

陽「オイてめえ」

波瑠「それは追追本編で出てくるでしょう。出てこなかったら『なんとなく』と思ってくれていい」

陽「決まってるのか」

波瑠「Yes sir!」

波瑠「今の所、ネタは三つ四つ、二つ三つ程浮かんでる」

陽「ほう」

波瑠「多分面倒くさいんで、殆どボツだろうけど」

陽「まじか…」

波瑠「とりあえず、ボツ確定のネタだけ晒しておく？」

陽「好きにしろ」

波瑠「まず、性転換の薬覚えてる？」

陽「広谷に飲まされたあれ？」

波瑠「いえす、あれが失敗作で、貴方は苦しみ出すの」

陽「ほう」

波瑠「そんで、放っておくと死ぬから、まずコールドスリープしたの」

陽「まじか」

波瑠「そして10年研究を続け、貴方を救う方法を発見し」

陽「おお」

波瑠「貴方は見事生存、私が貴方に『愛してる』といい

『この夜を止めてよ』が流れハッピーエンド」

陽「イイハナシダナー」

波瑠「とりあえず裏設定としては、私は貴方に恋をしているという設定なんだよね」

陽「そうなの!？」

波瑠「あと、裏設定2は貴方が恋愛に対して鈍感という設定」

陽「そうなのか」

波瑠「ちなみに裏設定1の伏線はちょこちょこあった」

陽「例えば?」

波瑠「『弄りやすくて好きだ』あれは照れ隠し」

陽「分かりづらいわ」

波瑠「あとは…序章で分かりづらिकाな?って思った表現が一つ」

陽「何?」

バチンという音がして、俺の意識は消えていく

波瑠「このバチンって音」

陽「確かになんだろうと思った」

波瑠「答えは改造スタンガン」

陽「オイてめえ」

波瑠「とりあえずのところは以上」

陽「お疲れ様」

波瑠「ちなみに本編はまだ続くから」

陽「また会う日まで」

波瑠「せーので」

陽「ん？ああこれを？」

「「せーの」「」

Thank you for reading .

幕間―楽屋裏―（後書き）

続く

玖の話（前書き）

さあて、いい加減これ終わらせて次の小説書きたいな

玖の話

波瑠「く」

???「めーん!!!」

急に謎に男が切りかかってきた

波瑠「……」

避けた

波瑠「……訳が分からないよ?」

???「死ね!宇宙の闇!」

波瑠「…うわぁ…」

ロングソード、西洋剣の一種で長さが80cm〜1mの代物

日本刀の太刀と同じくらいの長さ

それを片手で扱ってる所を見ると、ある程度の手練だろう

波瑠「なにすんねん?名を名乗れ」

???「俺は正義のヒーロー、名は山城達也!」

波瑠「……だめだコイツ、早く何とかしないと…」

山城「お前が違法な人体実験をしている事は明々白白！いざ神妙にお縄につけ！」

波瑠「人体実験の何がいけないの…？」

山城「何を…」

波瑠「私は只知りたいただけ、そのどこがいけないの？」

波瑠「欲して何が悪い？望んで何が悪い？願い求めて何が悪い？」

波瑠「お前は何様のつもりだ？なんで私の知識欲を阻害する？」

波瑠「そもそもだ、私は自殺希望者のみを被検体を選んでる。それだけで充分良心的だろうよ」

波瑠「この実験の御陰で、『生きたい』と願う人間が何人救われると思う？」

波瑠「『死にたい』と思う人間を死なせて、『生きたい』と思う人間を生かす」

波瑠「最高じゃないの、皆の願いが叶う世界、皆が苦しみから解放される世界」

陽「お前は何を狂った論理を偉そうに講釈してんだよ」

波瑠「狂った？私が？ははは何を申すか」

陽「とりあえずな？その理論を言つとな？俺が薬飲まされる理由にはならねえだろうが」

波瑠「人間という生き物は、技術を手に入れたら、使いたくなるんだよ」

山城「…動くな！」

山城さんが陽を人質に

陽「え！？うそー」

山城「大人しく降伏しろ！じゃないとこいつの命が——」

波瑠「……ほう……」

——空気が一変した

『跪け』、言葉には出てないが、空気がそう言ってるかのような

圧倒的な殺意

山城「——ッ」

波瑠「????? ???? ???? (本当に私を敵に回すと?)」

山城「…ア……」

山城「ヒイイイイ!!」

波瑠「……ふう……」

陽「お前怖っ!」

波瑠「主に何が?」

陽「雰囲気、後意味不明な言語を話したこと」

波瑠「怖いなそれは」

玖の話（後書き）

次回予告

「お願い、死なないで陽！あんたが今ここで倒れたら、読者さんや私との約束はどうなっちゃうの？ ライフはまだ残ってる。ここを耐えれば、元に戻るんから！

次回「陽死す」。デュエルスタンバイ！」

陽「待て」

波瑠「ちなみに次回最終回です」

拾の話（前書き）

ちやっちやと終わらせようか

拾の話

波瑠「さあて、システムの点検が全て終了したぞ」

陽「やつとか!」

波瑠「刮目せよ!これが精密人体遺伝子操作システムだ」

陽「おう!漢字の羅列にしても俺は騙されねえぞ!なんだよ遺伝子操作で!」

波瑠「遺伝子操作を元の貴方のDNAマップに合わせて修正、そしてIPS細胞等を使い人体を修正。これ以外に方法はないんだぜ?」

陽「まじか…失敗したら?」

波瑠「やり直して済むといいね」

陽「……」

波瑠「まあ大丈夫、何の為の点検だと思っておる」

陽「…じゃあ任せたぞ」

波瑠「任せておきなさい!」

波瑠「さあ…シヨウタイムだ！」

陽「意識がなくなったらツッコミ出来ない…ぞ…？」

波瑠「…さあて…バイオテクノロジー遺伝子工学の最高峰である私に、出来ない事はない」

A A A A T H U A A A T H U H U T T H U T H U X X

A A A A T H H A A A T H H H T T H H T H H X Y

A A A A A T H H A A A T H H H T T H H T H H X Y

A l l m a t c h

.....

——そして7200秒程の作業を終え、波瑠は舞台から降りた

陽「…うーん」

波瑠「おはよう、気分はどう？」

陽「…特に異常はないな」

波瑠「そう」

陽「色々問い詰めたい事はあるが、その前に…」

波瑠「ん？」

そして俺はポケットからガスガンを取り出し、発砲した

波瑠「痛」

陽「お前よくもやりやがったな？」

波瑠「…まあ取り敢えず、おかえり」

陽「何を良い話して締めようとしてんだよ」

拾の話（後書き）

番外編はあるが、ひとまずEND

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1512w/>

ほのぼの小説書く

2011年11月13日08時57分発行